

生きる  
育つ  
伸びる

子どもの現場から

▶ 1 △

ページ

ミークスの画面をスクリーンに映してス  
タッフと話し合つ森山薫さん(東京・  
神楽坂)

連絡手段(電話かメール  
か)や地域で限定したり  
もたよりやすくして、支  
援機関の「かたい」「使  
いづらい」イメージも変  
えていいのではないか」と  
考えました

例えば、スマートフォ  
ンでミークスの「サービ  
スをさがす」のページを  
開くと「カテゴリからさ  
がす」の下に「家族・学  
校」「生活・食事」「か  
えたいと話す。

野が表示される。「家族  
・学校」を選ぶと「子ど  
もの人権110番」など  
125件が出てくる。

「私たちが今やるべき  
ことは、ネットやSNS  
を批判することでなく、  
その環境を10代にとって  
も安全で安心できる環境  
にしていくことだと思  
い」と話す。

ミークスは、家族や友達  
からだ・勉強など人に  
は言えない「困ったかも」  
を手助けする10代のため  
のWebサイトです」。

トップページにそう書か  
れている。

画面はあわい青や緑、  
中間色が使われ、おだや  
かで優しい。このサイト  
を月間1万人以上の子  
どたちが訪れている。ど  
うにして作られ、ど  
う使われているのだろ  
う機関・相談先を見つけら  
れる。

ミークスのスタートは  
おととし4月。「私たち  
大人がレストランや不動  
産検索サイトで多様な情  
報を知るように、ミーク  
スは10代の子たちが自分  
の悩みに最も合った支援  
機関・相談先を見つけら  
れる。

## あなたに合った支援機関を

言えないことでも



### 終戦特集 8月に思う ▶上

ファッショングループデザイナー  
の森英恵さん(島根県吉賀  
町出身)は、戦時下、空襲  
の下を逃げ回り、旧陸軍の  
造兵廠に学徒動員された経  
験を持つ。死と向き合う毎  
日の内で、「美しいものを  
見たい」と切  
望した。それ  
が後に「きれ  
いなものを作  
りたい」という気持ちにつ  
ながったという。

8月15日がやってきます。  
73年前の夏、毎日のようにB29が飛んで来ていました。  
「今日は来ないな」と思っていたら、玉音放送。  
見上げると空が真っ青で、  
入道雲が浮かんでいたのを  
覚えてています。私は白い半  
袖のブラウスに紺のパンツ  
をはいていたでしょう。

そばの畑に空襲で大きな穴  
が開いていたり、友達の家  
族が亡くなったり、友達の家  
族が亡くなつたと聞いたら  
…という日常。明日は自分  
かもしれないという言いよ  
うのない不安。終戦間近は  
昼夜関係なく空襲で逃げ回  
りました。疲れ果て、自暴  
自棄になつて、「なるよう  
になれ!」と逃げるのをや  
めたこともあります。

仕事から帰つたら下宿の  
そばの畑に空襲で大きな穴  
が開いていたり、友達の家  
族が亡くなつたと聞いたら  
…という日常。明日は自分  
かもしれないという言いよ  
うのない不安。終戦間近は  
昼夜関係なく空襲で逃げ回  
りました。疲れ果て、自暴  
自棄になつて、「なるよう  
になれ!」と逃げるのをや  
めたこともあります。

それでも夢はいつも持つていま  
した。華やかなものは何も手に入りま  
せんでしたが、「平和にな  
つたら…」という希望はい  
つも抱いていました。

2枚のセーターをほど  
き、2色の糸を絡め深い彩  
りの1枚のセーターを新た  
に編むなど、乏しい物資の  
中で工夫をこらしました。

敵国小説だった「風と共に  
去りぬ」を読み、主人公ス  
カーレット・オハラに憧  
れ、美しいものを見たい、  
と切望しました。

その努力、その気持ちが、  
戦後のデザイナーとしての  
仕事につながっていると思  
います。(談)

## 美しいものを見たくて

戦争は遠い過去の思い出  
ではない。73年前の8月の  
終戦があって今があり、今  
は未来につながっている。  
戦争を体験した人々に「8  
月」の思いを聞く。

〔次回は14日掲載〕



スター球児語る思い出  
「真夏の球譜(上)」発売

夏の甲子園の予選参加校  
の多さなどから「全国屈指  
の激戦区」と呼ばれる神奈  
川県の高校野球の歴代スタ  
ー選手が、今だから語れる  
高校時代の本音や試合の思  
い出を明かしている「真夏  
の球譜(上)」(神奈川新聞  
運動部編著)が写真が、  
全国の書店で発売された。  
今年の元日から100回  
以上続けた連載が好評だつ  
たため、加筆して文庫にま  
とめた。

上巻には前巨人監督の原  
辰徳氏の他、中日の松坂大  
輔、DeNAの筒香嘉智、  
楽天の松井裕樹各選手ら多  
数の現役プロ野球選手が登  
場。往年のファンには懐か  
しい元巨人の柴田勲氏らも  
おり返つていている。  
監督など指導者を中心  
まとめた下巻は8月下旬に  
発売予定。問い合わせは神  
奈川新聞社出版メディア  
部、電話045(227)  
0850まで。

### エイズデーのテーマ決定

エイズ予防財団は今年の  
世界エイズデー(12月1日)  
のキャンペーンテーマが  
「UPDATE(アップデ  
ート)



生きる育つ伸びる  
子どもの現場から

## 第5部「悩み相談サイト『ミークス』」

「勉強ができないから学校に行つてもむだ。高校に行つてもどうせやめだ中2だし、これからやりたいんだけど、勉強で」。だが話しているうちに「本当は保育士になようぶだよ」とほげましりたんだけ、勉強でた。

「ウェブ制作会社も苦労したと思います。ふつうのサイトは特定の人たちに的をしぼって明確なメッセージを打ち出します。ところがこちらのお願いは『メッセージをなべく出さないでください』ということでしたから」

NPO法人「3key」代表の森山薦恵さん(30)はそう振り返る。10代の子どもたちの悩みに寄り添い、相談機関3keysを設立したのは慶應大在学中の2009年。きっかけは大学2年のとき、児童養護施設で学習ボランティアをした経験だった。

担当した中学生の女の子から言われた言葉は

## 大人の価値観押しつけない

## 貧困・格差知った学生時代



企業の講演会で参加者に語りかける森山薦恵さん(3keys提供)

困が子どもたちに大きな影響をおよぼしていることを知った。親が働きづめで宿題も手伝つてもうえず、塾にも行けない子は学校だから、授業が分からなくなると、自信も意欲も失つてしまふ。3keysはどんな環境で育つても十分な学習保障、進学保障がなされる社会を目指して出発した。

||毎週掲載||

不登校の子どもたちの生声を伝える「不登校新聞」が今年、創刊20周年を迎えた。学校に行かない選択をした子どもに寄り添い、多様な生き方と社会のあり方を問い合わせている。

不登校新聞が創刊20年道があり、「学校は休んでいい」と伝えたかった」と創刊の動機を語った。初年に6千部を超えた部数は12年に千部を切ったが、当事者の声を一面に据えるなど紙面を刷新。部数は3千部を超えるまでに回復した。学校に行きたいでも行けない。死にたい、でも死ねない。当事者の子どもの心は揺らいでいる。「その揺らぎを伝え

## 振り返り、今は明るく

||松江市砂子町||

学校に行きづらい子どもたちの居場所「フリーダス」(松江市砂子町)に、中学1年生の時から学校に行きづらくなった高校1年生の女子

インターネットやアニメ、漫画など、自分が好きなものを楽しむ時間を持つ。自分の世界は学校だけにあるわけではない。安心できる場所で、思う存分得意なこと、力を發揮できることに集中する、という考え方もあるよ。

保護者は、子どもがゲームばかりしていたら注意したくなるかもしれない。でも、家にいるときぐらい好きにさせてあげて。好きなものを取られるのは苦痛だから。今は苦しいかもしれないが、子どもは目的を見つけたらまっしづらに向かっていく力を持っている。一人旅やボランティアなど、本人の世界や視野を広げるきっかけがあれば、その背中を押して、支えてあげてほしい。

フリーダスのみんなより



学校に行けなくなったときの気持ちを振り返る親子ら=松江市砂子町、子どもの居場所フリーダス

いう2人。自分でも「何で行けないか分からなかつた」。仲が良さそうに見える女子同士が裏で悪口を言いつつは、これまでいたり、授業中もい合つたり、授業中もできるものではなかったと

いう2人。自分で「おしゃべりが絶えなかつた」。先生も注意しなかつた。いじめっ子をかばうこともあつた。そんな学校に行くのが耐えられなくなつた。先生は「勉強が生もいた。先生は「勉強が自分で進められるなら、学校に行けなくてもいいじゃん」と言ってくれ、楽になつた。テストも保健室で受けさせてもらえるよう調整してくれた。

2人とも、今は高校生。学校にも行ける日が増えてきた。中学時代のことを「プラスだった」と振り返る。「学校にどうわたままだつたら、もっと人間不信になつていたかも」と一人が言えば、もう一人は「自分の感情を押し殺して学校に行き続けていたら、自分はある意味死んじゃっていたと思う。学校に行かなくなつてから明るくなれた」と話してくれた。

(増田枝里子)

